

■ 1) 巻頭言:『ガンジス河の水利問題に関する 9 年ぶりの印バ次官級協議の開催』

相談役 堀口松城

1. 「バングラデシュのニュース」は、日バ協会理事でもある安達淳哉さんが、もう 10 年も前から、多忙なお仕事の傍ら、バングラデシュに関する日本語のニュースを集めて発行されているもので、バングラデシュに関心を持つ人達にとって貴重な情報源となっていますが、去る 8 月の同ニュースに「ガンジス河の水利問題について本年 8 月、9 年ぶりに次官級協議が開催された」旨の短いニュースが載っていました。

2. もともと大きな人口を抱えるインドでは、自然的人口増加とそれに伴う経済活動の伸びだけを見ても、水の需要が増えていることは容易に想像できますが、バングラデシュにおいても近年の目覚ましい経済成長を受け、水の需要はこれ迄とは異なった高いペースで増えていることが容易に想像されます。

そのような中で本ニュースを読んで浮かんでくる疑問は、第一に、ガンジス川をめぐるインドとバングラデシュ両国間の水利問題とは、9 年間も何ら交渉を行わなくても済んでいたような、のんびりした話であったのだろうかという疑問であり、第二に、どうしてこの時期に印バ次官級協議が行われることになったのかという疑問です。そして第三に、本水利問題の一つの大きな理由であった、インドがバングラデシュとの国境近くに堰を設け、インド中央部に灌漑用の水を引くことに加え、ガンジス河支流のフーグリ河の水流を増やして河口のカルカッタ港の堆積物を押し流すとの狙いがありましたが、この第三の狙いについて、ひょっとしてインド側は、過去 9 年もの間にバングラデシュとの水利交渉は棚上げしたまま、インド側だけで必要な水量を確保しつつ、カルカッタ港の堆積物を海に押し出す目的を既に達成してしまったのだろうかとの疑問が頭に浮かんできます。

3. そこで、早速取材してみたところ、先ず、上記第三の疑問について、インドは自国だけ必要な水を確保して、カルカッタ港の堆積物を海に押し出してしまったということはしていないとのことであり、一まず安心しました。

次に、それではインドは、何故 9 年ぶりに本交渉の再開に応じたのかとの疑問についてですが、理由は二つあり、一つはこれまでバングラデシュとの水の配分に反対してきた政党トリノムル・ kongress が、先の総選挙で大敗しただけではなく、

次の州選挙でも劣勢が伝えられている一方で、本問題に関し比較的柔軟なモディ首相が選挙で大勝したことが、本問題が動き始めた理由の一つである由です。

二つには、インドとしては、北東 7 州へのバングラデシュ国内を経由するアクセスの必要性が従来にまして高まっていることです。というのも、この点についてインドとしては、3 年前の「ドクラム危機」で、ブータンが実効支配している国境付近のドクラム高原で中国が道路建設を始めたため、ブータンの保護者として同高原に部隊を派遣し、中国軍隊とのにらみが続く事態となっていることから、バングラデシュ経由の物資輸送の必要性が今まで以上に高まっていることです。なお、ドクラム高地が重要性を持つのは、この高地の南に位置する「シリグリ回廊」が最も狭い地点は 32 キロの狭さながら、インドの本体地域と北東 7 州を結ぶ重要地域であるためです。

一方、インドが求めるバングラデシュ領の通過権の対象には、軍事物資が含まれてくるため中国はこれに強く反対しており、他方、バングラデシュとしても、ロヒンギャの帰還のために中国のミャンマーに対する圧力を必要としていることから、今は対中配慮がより重要となっており、なかなか難しい判断お

よび対応が 求められているのです。

これ迄のバングラデシュであれば、主としてインドとの関係処理を適切に進める上で、対中外交配慮に今回ほど深刻な判断を迫られることはなかったように思われますが、今や以前とは異なり、インドと中国の利害の対立に、バングラデシュの利害も直接係わってくるようになっていきます。間もなく中進国の仲間入りするバングラデシュが、このようにして中国、インドの双方からそれぞれの利害への支持を求められるようになったことは、経済的に目覚ましい発展を続けるバングラデシュの国際場裏における地位の高まりを示すものと言ってよいかも知れません。バングラデシュの友人たる日本としても、大いに応援したいところです。